

ぼくの家の猫

それは、小雨の降る七月のことだった。ぼく達四人は、昨日のテレビの話をしながら帰っていた。自動車部品を作る工場の近くを通っていたときだ、急にけん君が、

「あつ、坂のところには猫がいるよ。」

とさげんだ。ぼくたちはびっくりして猫のいるところを見た。

「かわいいね。」

「小さいね。生まれたばかりなあ。」

と、みんな口々にいいながら近くに行った。かわいいと思っていた子猫は坂道の壁にもたれかかり、どうにか立っているという状態だった。生きているのか死んでいるのかさえ分からない。

抱こうとすると、力の無い声でフーツと怒ってひっかいてきた。生きている。よく見るとこの子猫は片方の目が開いていない。しっぽもない。あまり食べていないのか体はやせ細っている。

このまま放っておいたら死んでしまいそうだ。ぼく達は相談した。そして、みんなの家で飼ってもらえるかどうかを聞いてみることにした。怖がっているので抱くことはあきらめて葵さんの持っていた紙袋に子猫をそおつと入れた。

誰かの家が飼ってくれるかもしれない。そんな期待をしながらぼくの家に来て帰った。母に飼うように頼んだのだが、

「うちは犬のくうちやんがいるから飼えないよ。」
と言って断られた。

正夫君の家では、家族にアレルギーがあるからと断られた。浩二君の家では、今まで猫を飼っていてそれが死んだばかりだからシヨックが大きくてまだ生き物を飼う気にはなれないと断られた。ほかの友達の家も同じような理由で断られた。こんなかわいい子猫をこの雨の中、捨てるなんてできない。その気持ちはみんな同じだった。

仕方なく、もう一度家に子猫を連れて帰った。でも、母は、
「だれか飼ってくれる人はいないの。うちでは飼えんっていったでしょう。」

と、困った顔で言う。

「いいじゃない。飼ってよ。」

ぼくは母の態度に腹が立って叫んだ。なんて冷たいんだ。動物好きの母がそんなことを言うなんて思ってもみなかった。

ぼくは、そう言った後、母を見た。母は、悲しい目をしていた。子

猫を見ながら何かを考えているようだ。しばらくして母が母の友達に電話をかけ始めた。何軒もかけている。電話で一生涯命子猫を飼ってくれないかと頼んでいる。でも、だれも飼ってくれる人はいなかった。母は心を決めたようだった。ぼくに静かに言った。

「この子猫、今から病院に連れて行くよ。」

呉にある動物病院に連れて行くと、先生に、

「この子猫は、母親にはぐれた後、何かの理由で病気になり片目が見えなくなっただけでしょう。しかも鼻がつまって何もにおえなくなっただけ、餌を探せず道をさまよい歩いていたのでしょう。もし、今日拾ってもらえなかつたら確実に死んでいたでしょう。」

と言われた。子猫は注射してもらい、薬もたくさんもらった。

家に連れて帰ると、あんなにおびえて怒っていたのがうそのように、静かにしていた。そして、ミルクを飲んだ後、ぐっすりと毛布にくるまって眠ってしまった。たぶん生まれて初めての安心した眠りだったのかもしれない。

あれから一週間が過ぎた。子猫はぼくの家で温かく世話をしてもらい、いずいぶん元気になった。ぼくは、こんなに世話をしてくれている母にどうしてあの時すぐに飼ってくれなかつたのかと聞いた。すると、「母さんだって辛かったのよ。でもね、猫だって人間だって命は命でしょう。生き物を飼うということは、その生き物の大切な命に責任をもつてことなの。一時のかわいいとかかわいそうとかいう感情では飼えないの。だから迷ったの。」

と教えてくれた。母はそこまで考えていたんだ。あの時、母をうらんだ自分を恥じた。

今、子猫は、幸せに恵まれますようにという願いからメグちゃんと名付けられ、元気にぼくの家で暮らしている。家族の人気者だ。家には犬のくうちゃんもいるので母ばかりに世話を任せてはいられない。ぼくは、えさ係になって母を少し手伝っている。メグちゃんの家も段ボールで作った。二階建てだ。窓から出入りしているが相当気に入ってくれている。あれほど心配していた犬のくうちゃんとは兄弟のように仲良くじゃれ合っている。そんなメグちゃんを見てみると、ぼくはほのぼのとした気持ちになるのだった。

